マルチ構成 ①特集

私の20歳の物語

与謝野晶子の歌集『みだれ髪』（昭和8年）の6首目にこんなうたがある。

＜その子二十櫛（はたち）にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな＞

平成歌人、俵万智は〝チョコレート語訳〟してこううたうのである。

＜二十歳とはロングヘアーをなびかせて畏（おそ）れを知らぬ春のヴィーナス＞

（『みだれ髪―チョコレート語訳』）

はたち。その響きが何かを引き寄せる。年長者は遠い昔日を、
はたちを生きる在学生はどうだろう。はたち手前の人たちは……。
年明け成人式を前に、マルチ構成で贈る「私の20歳の物語」――現在・過去・未来。

学生記者取材班

広報課で4人の学生が談笑していた。高校生を学内案内するツアーコンダクターたち。出動前のひとときである。

「小川君てさ、ちょうど20歳じゃん」と振られて、**小川拓己君**（20）＝経2＝が元気に応じた。

「そう、こんど成人式だけど、＜20＞歳と書くのがイイんだよね。19は思い切り子供でさ。数字の19と20は大違い。20歳になってうれしい」

「えっ、逆じゃないの」と言ったのは、ハタチを1つすぎた**山脇のりこさん**（21）＝法3＝。「18、19まではよかったけど、20でガク然。＜2＞の形だけですごくイヤだったな」

「20歳を実感したのはやはり選挙権よね。こんどの選挙で2度目だよ」と**池田まゆさん**（22）＝商4＝と**吉田さやかさん**（21）＝総4＝は、口をそろえた。〝年次〟を勝ち誇るように。さらに、みんなで――

「18、19だと、できないことも多いのよね。クレジットカードも親元の確認が必要だし。20歳になれば、居酒屋で年齢確認されても平気、バイト制限もないしね」

「でも逆に怖い。何でもできちゃうから。止める人もいないんだよ」

……

5分の会話でこの盛り上がりである。

20歳をめぐるニュアンス、色合いの違いもある。そこから生まれるドラマもいろいろ、デキゴトもいろいろ、にちがいない。

スレンダーなママ

ハタチのときはもうママだった。20歳の春、中央大学に入学した。大学に行く前に保育園に3歳になる娘を預け、授業が終わると同時に迎えに行った。ランチタイムが束の間の休憩タイム。彼女の昼食はいつもたらこスパゲティか辛口カレースパゲティだった。「JJ」に出ていてもおかしくないようなスレンダーな体

型の彼女が足早に帰る後姿はよくおぼえている。**湯沢綾子さん**（24）＝経4。

「大学に行っても違和感。保育園に行っても違和感」

当時の心情を彼女はそう明かす。保育園で会うお母さまたちとは一世代違う。かといって、大学入学してでテンションの高い学生ともどうもしっくりこない感じ。

「今までの生き方じたいも違うんだよねぇ」

中3のときイギリスに留学した。留学と言えば聞こえはいいが彼女いわく、「親にとばされた」。両親は堅気の公務員。長野県の狭い町で彼女の素行は目立った。2年半後に帰国し、しばらくはフラフラしていた。身ごもったことがわかってから大検を受けた。その後、娘と2人暮らしをしながら大学受験のため予備校に通った。

そんな彼女に聞いてみた。

――昔と今で変わったことは何？

男選びとか……。

「昔は顔で選んでたよね。お金とかカンケーないし。でも歳をとると本質的なものをみるようになった！人間的にいい人とかフィーリングが合う人」

そう思うようになったのは娘の影響が大きいという。「自分の子って顔じゃないんだよね。鼻水たらしても気になんない、かわいい」

ハタチを4つ超えたいま、公認会計士になるため来年5月の試験に向けて勉強中だ。

「シングルマザーだし、一般企業は雇ってくれない。親子2人、生活する糧を見つけなくては」。そういえば大学2年になったころ、そう言っていた。危機意識が一般の学生と明らかに違っていた。

フツーの女子学生より一足早い人生サイクル。娘がハタチを迎えるころ、母はまだ38歳である。

教授編1――学生結婚

赤ん坊背負って…

「二宮金次郎は柴を背負ってるけど、こっちは赤ん坊背負って勉強してたんだ」

そうおっしゃる人もいる。**矢島正見文学部教授**（57）＝71年中央大学卒＝である。

――20歳のころを教えてください。

「高校2年のころからかなりニヒリズムに陥っていた。生徒会副会長とかやっていたからみんなの前じゃ明るいリーダーだったけど。読書は好きで、ニーチェ、サルトル、太宰治、芥川龍之介……いろいろ読んでいたよ。大学進学もする気はなかったけど、尊敬している先生から、受かってから行くかどうか決めればいい、と言われ、合格を蹴って放浪の旅に出るのもカッコイイじゃん、と思ったわけ。で、中大を受けたら合格、放浪しないでそのまま進学した。入学後、学生運動で大学は授業がなくなってしまった。最初は自分も、アナーキズムに傾倒してちょっと運動に参加していたんだけど、共産主義の上からの命令が絶対ってノリにうんざり。さっさと辞めて、19歳から付き合っていた彼女に一直線だよ」

恐れ入って、聞きおれば、

「彼女ができておめでとうございます、くらい言えよ」

と叱られた。成人式の日もその彼女と日比谷公園をデート。駅を見ると、着物姿の若い女性が多いと気づき、「きょうは成人式かぁ」と、そんなあんばい。めでたくその彼女と22歳で結婚、24歳で父になった。ここで、

「二宮金次郎は柴を背負ってるけど……」と冒頭のコトバが飛び出すのである。

犯罪心理学の専門家として少年犯罪などの青少年問題にも尽力、多くの団体の委員も。さぞかし真面目な学生時代を過ごしていたかと思っていました、と言ったら、

「変人には変わった奴の気持ちが分かる。それだから偉くなっちゃったんだよね、ハハハ」と冗談のように。

専門の社会学からみたユニークな「20歳論」は、のちに紹介しよう。

無気力から心機一転

学生結婚といえば、**廣岡守穂法学部教授**（54）＝77年東京大学卒＝もそうである。20歳の物語―廣岡教授の場合。

潮が引くように学生運動が消え去ったポスト全共闘の世代。無気力・無関心・無責任――「三無主義」と形容された時代のようである。生まれてないからよくわからないけれど。

廣岡青年も、大学の授業をサボって、別のことばかりしていたという。そのひとつがマージャンだった。「今日こそは大学に行こう」と思っても足がいつの間にか店に向いてしまう。明確な目標を失った学生生活。強い不安と恐れに襲われながら、泥沼のような生活から抜け出せなくなっていた。

「大して儲かってはいないけれど、頭のいいところを、（マージャンで）悪いように使ったんだ。ハタチのころは暗かったなぁ、じつに」

1週間に10カ所も家庭教師をしながら、東京大学文科一類に再入学していた。前年に理科一類に入学したが、物理・化学に興味が持てず、ぼんやりと志望していた研究者も、成功はしないだろう、と考えてのことだった。しかし、入学してからぼったりとやる気がなくなってしまったという。「燃え尽きてしまってね」

家庭教師のアルバイト、恋人との電話、マージャン、その3つに明け暮れる日々が過ぎていった。そんな生活ががらりと変わったのは、21歳になって、両親の反対を押し切って学生結婚をしてからだった。スーツに身を包んで学校に通うようになった。心機一転である。

綱渡りをしていたような20歳のころを、教授は「めちゃくちゃだったあのころが、懐かしい」と振り返る。「あのころの自分は、ある意味で本物だったんだ。そうも思うよ」

家庭には、5人の子供たち。子育て日記も知られるところである。

ハタチの現在形

なにか、学生結婚のススメになってきたようなので、ハタチの現在形を生きる在学生の声を拾ってみよう。その生き方とともに。

「コーヒー」ブレイク

準硬式野球部に所属する**豊田和晃さん**（21）＝文3＝は言う。

「う―ん、20歳はなんとなく過ぎてしまった。特に何が変わったというわけではない。なる前は、20歳って大人、落ちついているというイメージを持っていたけど」

それでも、「上級生になっていくにつれ、深く、周りのことを考えられるようになった。飲み会で、自分は酔っちゃいけないとセーブしたり。あと、自分でどうしていけばいいか、考えていくようになった。1年生の時は、なんとなくついていくだけだったからね」

――親に対する見方も変わった？

「20歳になったからというより、大学入学を機に変わった要素が大きいよね。洗濯とか弁当とか。自分でやってみて改めて、感謝するようになったよ」

――食べ物では？

ある成人式

05年１月９日晴天。冬の透き通った日差しが振袖を引き立てる。

成人式の会場にはざっと２００人。栃木県の、とあるイナカの町である。

「ひさしぶり～」「元気～」のざわめきが静まりかえり、お偉いさんの話が始まる。「本日は、天気にも恵まれ……」。途中でウトウトしかけた20歳の目と耳を覚ましたのは、しじまを破るイノセントな声だった。

「うぇ～ん、うわ～ん」

２歳くらいの女の子が、ドレスを身にまとった母親のひざでぐずっている。みなの視線が集中する。彼女は、すぐさま子どもを抱きかかえ出ていった。そんな、はたちもいる。

式がおわって外に飛び出すと、目立つのは、ピンクやブルーの袴にリーゼントの男たち。「つっぱることが男の～たったひとつの勲章だって、この胸に信じて生きてきた～」(笑)

しかし、こういう軍団にかぎって根はモロかったりする。長年想い続けた女の子と写真がとりたくて仕方ないらしい。

夕方は同窓会。魚屋ではたらく子は、カラオケのマイクを手に「きょうは○○町店にお越しくださいましてありがとうございます。奥さま、きょうの目玉はなんといってもサンマ！　今朝伊勢湾で水揚げされたばかり」と、アナウンサー並みにうまい。先のヤンママは、「主人から電話があって……」とおいとま。競馬とパチンコに目覚めた大学生同士でわけのわからない会話をしているのも聞こえる。

時効をむかえた恋愛話も花ひらく。「俺たちじつはつきあっていたんだ」と先生にばらす人。「なんで俺たち別れたんだっけ？」なんて無責任なものも。すると「Ａ子、帰り送っていこうか？」という男の声が。じつはふたりは付き合っているらしい。同級生で絶対１組くらい夫婦になると言われているけれど（しかも喋ったこともないふたりが）、こうやって、みなの知らないところで結ばれていくのね……。

同窓会とは不思議なもので、２次会、３次会となるにつれ、少数に分かれていく。ある男女グループは居酒屋を転々とし、ある男組は健康ランドへ向かいお湯につかって旧交を温めたらしい。そうかと思えば、朝までファミレスでぺちゃくちゃしているのもあり。

ハタチになった瞬間に、なにかが変わるわけではないけれど、自分の中でなにかスイッチが入った気がする。それぞれのハタチのスタートラインは違っても、こころのどこかにあの頃の思い出がきっとある。

（学生記者　白田彩乃）

缶チューハイの誓い

「コーヒーは飲めるようになったよ」。つい笑ってしまったのだが。

将来は先生をめざして。「究極の夢はプロ野球選手だけどさぁ」と漏らした。

「予備校の友だちに同じ誕生日のやつがいて、２人でハタチのお祝いに缶チューハイを買って予備校近くの公園で飲んだ（笑）。絶対に、大学に入ろうなと将来を語りながら」

〝缶チューハイの誓い〟が実って、浪人脱却、中央大学商学部へ。商学部ゼミ連の副代表の**菅野光憲さん**（22）＝商２＝だ。

1年の夏までは、ゼミ連とサークルに力を注いだ。大学内で活躍することも大切なのだが、中にいすぎては考えが固まってしまうと、ビジネスコンテストに挑戦した。

「空港ビジネスがテーマのビジネスコンテストでは、ロボットを利用した企画を考え、優勝した。そして、レクリエーションビジネスがテーマのビジネスコンテストでは、渋谷にカフェを作る企画を考え、準優勝した。単にムダに時間を過ごして遊ぶのではなくて、時間を有効利用しながら遊びたかったんだよね。そういう意味ではビジネスコンテストは遊びだといえるかもしれませんね」

20歳って何？

「小学生とか、中学生のときは、20歳ってすごく大人に見えていたけど、実際は〝なっちゃった〟って感じ。20歳になったからといって、何も変わらない。飲酒とか、年金とか形式的なことだけで、自分自身、内面的なことは何も変わらない。自分はずっと変わらない。昔と変わらないねって言われることが自分にとって一番の褒め言葉！　10年経っても、今のままの自分でいようと思う」

雄々しい決意である。

「いま、死んでもいい!!　やることはやったから、いままでの自分に満足している」

小泉サンと違って、「やっぱり、死にたくないや」と笑った。

「まだまだ子供」実感と実像

20歳とは、と聞くと、「大人、というイメージ」という答えがほぼ共通して返ってくる。「そう思っていたのに、私はまだまだ」といったふうに。でも実像はどうだろう。

「来年、いよいよ20歳だけど、あまり実感がない。まだまだ子供だなぁ……と思うし」と**渡辺真梨絵さん**（19）＝法1。

でもずいぶんしっかりして見える。法曹への道をめざし、研究室に入ってまっしぐらだ。「入学当初は戸惑いのほうが大きかったけど、友だちと出会って、将来の話をするようになってから、自分の考え方が変わった。自分も、もっと真剣に考えなきゃって」

新潟から出てきて、一人暮らし。

「実家にいたときは、掃除とか洗濯とか、人任せにしていたことが多かったけど、今は、家事はもちろん、学校のいろんな手続きも、全部自分でやらなくちゃいけない。いままでの生活とは全然違って、苦労することもたくさんある。そんなときは、仲良くなったアパートのお隣さんと助け合ったりしているんです」

ね、やはりしっかりしているでしょ。

話を聞くうちにはや午後6時すぎ。外はすっかり暗くなってしまっていたが、「これから法職の授業があるんだ」と急ぎ足で教室へ向かった。

×　×

ちょうどハタチの**飯島綾佳さん**＝法2＝も、「まだまだ子供だなぁってつくづく感じます」と、はじめの口ぶりはまったく同じ。じつはオールラウンドサークル「ルシード」の幹部である。ことしこのサークルに入った学生記者の目には、20歳のカガミ、とも映るのだけれど。大所帯のサークルをしっかりまとめて、盛り上げて。

「20歳になって、何事にも責任を持とうって意識は強くなりました。自分の行動は自分の責任。人に頼らないこと、それを目標にしています」

この夏、法学部の国際インターンシップで東ティモールへ行った。

「高校のときから、ストリートチルドレンに関心があって、現地の様子を自分の目で見てみたいと思っていたんです」

東ティモールは、国連主導の住民投票でインドネシアから02年に独立した21世紀最初の独立国。地域や身分で言語が4つにわかれ、国連などの開発援助も滞りがちだという。

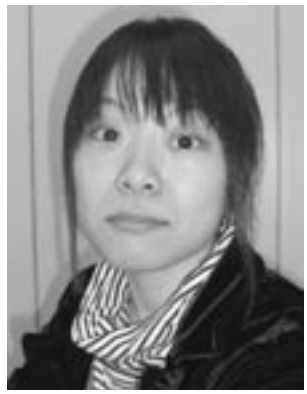
「日本と１８０度違う国が本当にあるんだなぁって実感。このインターンシップを通して、人を助けることの重要性や難しさを改めて感じました。そして、人を助ける仕事をしたいという意志がとても強くなりました」

リンとしたものが伝わってきた。

×　×

気がつけばあと1年で20歳。思い描いていた大人像に近づいています

か？　という質問に、答えは「NO」だった。「迷いがない人、責任を取る立場になって、責任が取れる人が大人だと思うんです。自分はまだまだ足りない」と**中田彩子さん**（19）＝商1年。「もっと人間的に大きくなりたい」



音研マンドリンクラブとアナ研、どちらも頑張っている。「マンドリンは生涯やりたいこと。アナウンス研究会は、将来やりたいことのために。マスコミ志望なんです」。マンドリンは高校時代から続け、中大附属高マンドリン倶楽部の9月定期演奏会にも、ピンチヒッターとして出演した。

アナ研のほうは、「しゃべることがあんまり得意じゃなくて、早口だし、聞きづらいって言われるんです。ね、そうでしょう？」。そんなことないわよ、ハッキリしていて。

「私、実家から通っているんですけど、一人暮らしの子たちは、自炊してたり、身の回りのことを全部自分でやってますよね。えらいなぁって思うんです。私も親の負担を減らせるようにならなくちゃ」

20歳になるという節目にこだわらず、自分のペースで、自分の中の大人に近づいていく。残りの10代を謳歌しながら。

ザ・ポジティブ

「実はこの前、空き巣に入られたんですよ」。けろっとした顔で話しだした。「警察に電話したんですけど、なかなか信用してくれなくて。『本当に盗まれたの？』ってね」。被害総額約10万円。「警察の現場検証を生で見れたし、これからは気をつけないとっていう教訓にもなったし、人生の授業料だと思えば……まあ、いいや」

ポジティブ・シンキングである。**高橋圭太さん**（20）＝法2。

ある日、美術館を訪れた。美大の友だちの影響もあったのかもしれない。「なんでこんな絵が描けるんだろう」。既成概念にとらわれずに表現している画家たち。そして思った。「もしかしたら自分にもできるんじゃないか」

9月に誕生日を迎えた。20歳になって変わったことは？　「自分の力不足を認められるようになりましたね。だから、もっと大きくなろう、いろんなことを知ろうと。空き巣のときは、周りの友だちが心配してくれて、いろいろ気づかってくれたんです。僕にはそんな友達がいるんだってわかったこともすごくうれしかった」

ネガティブになったらそこで試合終了。「いま興味を持っているのは、デザインとマーケティング。学びつつ、既成のものをどう壊していくか。失敗の数、そしてそれを乗り越えた数は、誰にも負けたくないです」と言った。

かつて「モラトーリアム世代」という言葉がはやったことがある。まあそのうちにと決定を先延ばしする若者たちをそう呼んだ。時代がシビアになったのか、「20歳」を機に「もっと大人に」「しっかりしなきゃ」という自覚はよほど強くなったようである。うまく果たされるかどうか、意識と現実は別ですけどねえ。

「瞬間、瞬間が思い出」

黒田真吾さんは商1ながら26歳。

あだ名は「黒兄（クロニー）」。同じクラスの10代の女の子から恋愛相談を受けたり、みんなを家に招いたりと、お兄さん的存在だ。

「青年海外協力隊のポスターを見て、行くことを決意したのが20歳だった。トヨタで自動車整備士の仕事をしていたんだよ」

そこからさらに経験や訓練を積んで1年3カ月後、モロッコに派遣された。

なぜ、青年海外協力隊？

「実家がホームステイの外国人の受け入れを行っていたし、自分もホームステイや旅行などで、海外に触れるチャンスがあった。興味があったし、純粋に海外に行きたいという気持ちからだよね。しかし〝旅行〟と〝生活〟では大きく違った。モロッコではいろんな刺激を受けた。途上国と先進国の違いなど、学ばなきゃいけないことを感じたな」

モロッコ生活2年あまりののち、一から受験勉強をし、商学部に入学した。

モロッコの20歳は？

「モロッコでは、日本みたいに20歳という区切りの意味合いはないですね。もともと大人と子供の境がないんですよ。みな、一人の人間として、扱われている。日本の成人式みたいなものは、12歳のときに行われるイスラム教徒になる儀式かな」

自身の20歳のメモリアル。

「大きなポイントだった。青年海外協力隊への参加を決めたのもそうだし、その海外生活をきっかけに、大学にも行くことになったし、奥さんとも出会ったんだもの」

年上美人の奥さんと結婚をしたのは05年2月。モロッコで知り合った。奥さんも音楽の先生として協力隊の参加者だった。

簿記に励みつつ、「6時に起きて、毎朝奥さんと自分のお弁当を作っている」そうである。

素敵な言葉を聞いた。

「瞬間、瞬間が思い出」

中大職員の学生時代

20歳より14歳の原点

10・23ホームカミングデーの日、似顔絵コーナーには列ができた。もう一人と手分けして、30人もの顔を描いた評判の〝画伯〟は**五十嵐星汝**（せいな）さん（33）＝95年商学部卒。多芸な広報課職員である。

すこしだけ前の、学生時代。「ちょうど20歳のころに、辞達学会へ入ったんですよ」。ほらね、口八丁手八丁、の証しである。それまで社会科学系サークルに入っていたが、「『来たれ、野望ある諸君！』―辞達学会のコピーに惹かれて。左から右への大転向？だったのかなぁ」と笑いながら。「他にもサークルは5個ぐらい掛け持ちしてましたよ」というから、アクティブな青春時代だ。

悩みなど無縁？　と水を向けると、「私の人生の転機は、そうね、20歳のころよりもむしろ14歳のときだった」と言って続けた。「祖母が亡くなって、共働きの両親の手助けに、中学2年のときから家の料理当番を引き受けたんです。精神的に強い子を育てるというわが家の方針もあって、私の人格形成はその中学時代にあったような気がします。細かいことに、くよくよしない性格も」

韓国の留学生たちとよく付き合った。今でもその交流は続いていると

いう。「中央大学韓国人留学生会の威力たるや、顔ぶれもそうそうたるものですよ。中大生が韓国へ来ると聞けば、＜C＞のマークの旗をもって空港まで迎えにきてくださるんですから」

母校愛もひとしおである。

ハダカの青春

大きな体。1号館事務棟ですれ違う職員は思わず横歩きする、というウワサもある……。

管財課長の**平岩大典さん**（49）＝80年商学部卒＝だ。

いま、何キロあります？

「125キロ、くらいですねぇ。身長は182センチ」

20歳のころは？

「150キロはありましたよ。身長はまあ変わらないよね」

隠れもなき中大相撲部出身。大学3年の6月、東関東インカレで準優勝を果たした学生力士だった。いま監督として相撲部を率いる。

まさに「裸の青春」である。

「練習はつらかったですね。勉強は……やはり相撲のほうが優先になっていましたけど、ハハハ」

当時道場は理工学部の敷地内にあって、名門・レスリング部やボクシング部などの精鋭たちが同居していた。「国際大会のメダルをもち帰ってくる選手もいましたからね。恋愛？　そんなものないですよ。夜はよく酒を飲んでいましたね」

ある悔恨。

「3年のときに後楽園から今の多摩キャンパスに校舎が移って指導者があまり来られなくなった。甘えたんですね、稽古がおろそかになったんですよ。だから3年の東インカレの先はベスト8止まりだった。きちんと目標をもって稽古を続けておれば、とそれが、悔恨ですねぇ」

ほぼ30年をへて、20歳の自分にメッセージを送るとすれば、と向けると、すこし悩んでから、「マジメにやれよ」。笑って、太い体が揺れた。

教授編2――熱中

偏差値からの離陸

「私の20歳のころは暗かったですよ。それでもいいですか」。電話先からそんな声が聞こえてきた。声の主は理工学部情報工学科の**鈴木寿教授**（46）＝83年大阪大学卒。ロボット工学、人工知能の先端研究者として知られる。

「20歳のころは、ちょうど浪人，2年目でした。ほら、暗いでしょ」。いやいや、青春は明るいだけじゃありませんから。「私はT大受験にこだわっていたんです。まぁ、進学校出身だったこともあるんでしょうね。戦後ピークの受験戦争世代でしたから、そのころに生まれたことを恨みましたよ」

浪人2年目。「夏ごろに受験した模擬試験で、全国有数の順位が取れたんですね。そうしたら、なんかもう偏差値が馬鹿らしくなってね（笑）」

何に興味があったんですか？

「私はこう見えても、幼いときから大のSFファンなんです。それで、そんなことが勉強したいなぁと」。偏差値主義からマニアの世界へ。けっこう過激な転向だが、「その当時、生物を機械になぞらえるサイバネティクス、要はサイボーグ（サイバネティック・オーガニズム）の研

究ができるのは、日本では阪大と筑波大だけ。が、よく調べてみると筑波は生物学的で少しやりたいことと違った。それで自然と阪大志望になりました」

サイバネティクスとは例えば、人間の腕の動きを機能として見て、それに相当するモデルをつくり同等の機能を再現する。ある意味で、人造人間を作り出すような研究である。

「いまの自分があるのは、あのときに偏差値主義から脱出できたからだと思うんです。私のハタチのころは明るくはなかったですが、それに気がつけたことで人生が大きく変った転換点でしたね」

現在は大学での研究者と、最先端技術を扱うベンチャー企業の技術顧問という二足のわらじ。「最近、人のつながりの大切さを感じますね。研究をしていても、ベンチャー関係の企業を見ていても本当にそう思います。つながりから、新たな技術や成果が生まれてくる。そんなことを20歳のみなさんには伝えたいな」

人工知能研究者から聞いたのは、リアルな人間関係の大切さだった。

トコトン・スピリット

「20歳なんて、ずいぶん昔のことよ」。商学部でスポーツ産業論のゼミを持つ**早川宏子教授**（61）＝66年東京教育大学卒＝は穏やかな口調で、でも照れるように。

学生時代はテニス部に入り、トコトン練習に励んだ。春・秋のリーグ戦がある。自分たちの代で成績を落とすわけにはいかないと、人数がぎりぎりの中でがんばった。「高校から、強い選手を連れてくる大学もあるけど、うちはそういうのじゃなかったから」

成人式は？「成人式には行った覚えがないわねぇ。たぶん、スキーか何かやってたんじゃないかしら」。スポーツとともにあった青春。「あのとき、真っ黒になって一緒にやった仲間とは、いまでも会うのだけれど、そうすると、あぁ、私にも青春があったんだぁと思うのよ」

いまの学生は、アルバイトに一生懸命になる人も多い。「お家の事情とかで仕方ない場合もあると思うけど、もしそうでなければ、学生時代はお金がなくたっていいのよ。若い時代はお金がなくても何かに打ちこめる、すてきな時代なんだから」。やりたいことをやり、友達と語り合う。宝石のような時間だ。

本は山岳小説をよく読んだ。「私、山へ行ったことがないのね。山岳部の人との交流もなかったし」。戦争の本もよく読んだ。戦争をしていたころの日本はどんなだったのだろう？　戦争に行っていない女の人はどんなことをしていたんだろう？

教授も「戦争を知らない世代」になる。

「トコトン」という言葉が何度も出てきた。

20歳とはどういう時期ですか？

「自分を見つめなおす機会かしらね。大人っていうのは、自立していて責任をもって行動する人のことだと思うわよ。そして何かにトコトン打ちこむことね」

いつから大人だろうねぇ

こんな見方もある。先に登場の**矢島教授**の「20歳」論だ。

「大人とは、職業・生活・精神の3つの観点からの自立ができている人、ということになる。だから20歳で大人と決めつけるのは、現代は無理でしょう。30歳でもねぇ、どうだか。20歳で大人なんてのは、社会のファジーな通念なんだよ。でも法律やら何やらでどっかでライン引きしなければならない。そこで18歳や20歳で法律上は大人扱いすることにな

る。しかし、人の成長は曲線を描いているから、ピシッとこっからが大人なんて決められない。だから答えは、『わからない』だね」

ホワイトボードに曲線を描いての説明である。なるほど、平均寿命80歳超の時代になって、そのぶん青春期も相応に伸びてきた、とする説もある。それに従うと、昔のハタチは今の30―35歳、還暦・60歳も40―50歳代の〝若造〟？

――近年の荒れる成人式については？

「騒いでる奴はそのあとの同窓会や飲み会に出たいだけなんじゃない？　行政も甘やかしすぎだよ。なにも行政主催で式などすることはない。やりたければ、結婚式のように親や親戚がすればいい」

ピシャリとおっしゃった。

国際結婚

終わりに、ひとりの卒業生を紹介したい。**柿元理榮さん**（24）。04年商学部卒。学生記者もしていた。大学3年のとき、ある挫折があった。クリケットの五輪日本代表選考に落ちた。クラブでは中心選手の一人だったのに。卒業後は、公認会計士をめざして励む日々だった。

そんな彼女から、「結婚することになりまして」と聞いたのはことし春先。そして「鹿児島の実家に帰ります。一応、結婚準備、そうなるのかなぁ」と朗らかな声で報告を受けたのは夏の終わりだった。編集室へのメールや電話はいつも唐突。そのたびに驚かされる。

国際結婚なのである。お相手は、クリケットを通じて知り合ったインドの人。10歳ほど年上。世界展開の証券会社・メリルリンチの、商品開発部門のエキスパートである。東京を離れて、この夏から香港勤務になった。それで彼女はしばらく実家に。

≪初めてのブログです。きんちょ～。まだ誰にも開設したこと言っていないし、……≫

帰省してブログを開いた。それなら驚かないけれど、英語対訳付きだ。

≪It's my first blog. ／ am soooo nervous. ／ have not let anyone know about my blog, so ……≫

こなれた英語でしょ。

「そんな才能があったとはね、つゆ知らなかったよ」

そう冷やかすと、「えへん！」という顔をつくって言った。

「彼とのコミュニケーションからも必要だし、実家で両親や祖父に引き合わせたときは、〝鹿児島弁〟の通訳もしたんですから。ソレナリに磨いたんですヨ」

つい先日、友人の結婚式で上京した折に会った。なにより笑顔が輝いていた。

「代表選考落ちという21歳のショックもいい経験だったなと思います。いま、国際会計士（米国公認会計士）の勉強をしています」

インドでのウエディングは来年1月、インド独立記念日に。日本各地の成人式がすぎたころである。

――「ハタチの現在」に、こんなうたを重ねてみたい。本誌05年秋季特別号の、歌人・山下雅人さんの巻頭短歌からその一首。

△青葉にまた青葉重なり透明に近づくものを〝君〟と呼ぶべき▽

【学生記者取材班】

（4年）経済学部・**西原香保里**

（3年）商学部・**猪瀬智巳**▽同・**白田彩乃**▽文学部・**津江瞳**

（2年）総合政策学部・**滝沢孝祐**

（1年）法学部・**池内真由**▽商学部・**岩倉彩**▽文学部・**加藤理香**▽法学部・**中田綾美**▽同・**山崎綾香**